



▲ホンダウェルカムプラザにはセナの訃報を聞いたファンが数多く詰めかけた。マシンには花束が、ノートにはセナへの思い出が記された

5月1日、モータースポーツ界に衝撃のニュースが走った。「音速の貴公子」、コンクリートウォールにクラッシュ／天才・セナが、我々の前からはなくなり散ってしまったのである。

この日、鈴鹿でのレース取材を終えて事務所に戻っていた私を待っていたのは、新聞社から立て続けに届いていた電話のメッセージだった。「セナの状況がわからないので連絡が欲しい」。焦った声にいやな予感がした私は、急いでテレビのスイッチに手を伸ばした。そこへ飛び込んできたのが、あの激しいクラッシュシーン…。レースの写真を撮り続けてもう20年にもなる私でも、遭遇したことがない大事故だ。鈴鹿に消えた小河等の事故が、重なり合ってしまった。私が、初めてファインダーを通してセナの姿をフィルムに納めたのは86年のベルギーGP。セナは、黒いJPSカラーのロータスを駆っていた。その後、日本でのF1ブーム到来とともに、最強マシンのマクラーレンへ移籍し、さらにホンダエンジンを手に入れたセナは恐いもの知らずのドライバーへと成長した。その頃、ちょうど私も仕事でF1を撮影する機会に恵まれ、今思えば、セナがトップドライバーへの道を極める過程を見ることができて、幸せだったのだろう。今よりも華やかで、活気に満ちあふれていたF1界の真ん中にいたセナ。その勇士を撮らせてくれたセナに心から感謝したい。セナが亡くなり、多くの関係者と話をした驚いたのは思った以上に彼のファンが多かったことだ。母国ブラジルと同様、ホンダと日本を愛してくれたセナだったからなのだろうか。私自身でさえ、いつの間にか心に浸透していたセナの存在を、あらためて感じている。だからこそ、彼の走る姿を見ることができなくなった今、セナのファンであることに気付いたことが、とてつもなく悔しいのである。

セナの感動を



▲今思えば、TVで見たセナの表情には、どこか寂しそうなものがあった



▲TVシリーズで撮影したセナの最後のカット。これ以降、私のファインダーの中にはセナはいない（レース開始直後、第1コーナーでリタイアした為）



▲ホンダ、鈴鹿での最後のラン。「ファイナルランへの疾走」のタイトルでJPSに展示した作品だ

FROM TUNING SHOP

日頃は、元気いっぱい印のチューニングショップのオーナー達も、セナのアクシデントには、表情を曇らせてしまったゾ。話を聞いてビックリしたんだけど、実はみんなセナのファンだったのだ。それにしても、さすがはチューナー。あのクラッシュの理解までしてくれたんだから。



柿本RACING 柿本由行氏

セナにもう少し不真面目さがあれば、事故は起こらなかったと思うなあ。でも、その真面目さがセナの魅力だったとも言えるし…。テレビであのシーンを見たときは大丈夫かなと思ったけど、セナがなんで死んだかという、クルマのアンバランスをドライバーがカバーしたからや。セナが天才やとすると、その天才がクルマのアンバランスをカバーしたから事故が起きたんや。天才であってもそれはせん方がよかったんやろうね。全てが悪い方向へ行ったようやな。F1が好き息子には、かわいそうでセナのことは言えなかったよ。セナがリタイアしたらテレビのスイッチを切ってたくらいやから、これからのF1は面白くないやろう。モナコも見てへんかったしね。



TRIAL 牧原道夫

最初は、ウソやっていたね。すごい打撃を受けたなあ。他のドライバーは遠い存在って感じなんやけど、セナだけは別やったなあ。プレッシャーに強くなって、デリケートなところが人間的で…。それがセナっぽくて良かったんやろうね。プロストならあはならなかったと思う。だから、事故のことは、セナに限ってっていう意識があった。マンセルならB29みたいやから考えられるけど、セナがいなくなって、F1は衰退していくのちゃうやろか。シューマッハだけじゃ物足れへんし…。柱を失ってしまったんやね。人間って、「自分は、他人とは違う」と思っている部分があるでしょう？その部分が形になったのが、セナだったんじゃないかなあ。そう思うよ。